

JICA 教師研修 学習指導案・授業実践報告書

【実践者】

氏名	横田 美紗子	学校名	千葉県野田市立柳沢小学校
担当教科等	全教科	対象学年(人数)	1年(52名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2021年10月 ～ 2月(8時間)		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域:道徳科、国語科、生活科		
2. 単元(活動)名:せかいと なかよし		
<p>3. 授業テーマ(タイトル)と単元目標</p> <p>授業テーマ:「低学年児童に、国際理解の素地を育む指導方法」</p> <p>単元目標:世界の国の人々や文化に関心を持ち、文化の違いを理解し、自国や世界の国々の文化の違いを認めようとする態度を養う。</p> <p>関連する学習指導要領上の目標</p> <p>道徳科 C-18 国際理解、国際親善 他国の人々や文化に親しむこと。</p> <p>国語科 言葉がもつよさを感じるとともに、楽しんで読書をし、国語を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。</p> <p>生活科 学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付き、地域に愛着を持ち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする。</p>		
4. 単元の評価 規準	①知識及び技能	世界には、さまざまな言語や生活、文化があることを知り、日本との相違点や共通点に気付いている。
	②思考力、判断力、表現力等	自分が伝えたいことを絵や文等で表現し、相手にわかりやすく伝えようとしている。
	③学びに向かう力、人間性等	感じたことや分かったことを共有し、今までの学習を生かして、自分が伝えたいことを紹介しようとしている。
5. 単元設定の理由・単元の意義 (児童観、教材観、指導観)	<p>【単元設定の理由】</p> <p>人は自分と他者との同じ部分に安心して、違いに対しては除外しがちである。自分が属するコミュニティにおいて自分が多数派であれば、同質性を求め、差異を排他的に見ることは多々ある。ところが、違うコミュニティにいけば、自分が少数派になることもあり得る。</p> <p>そのため、急速にグローバル化が進む現代社会において、広い視野とともに多様な異文化の生活・習慣・価値観などの「違い」を「良さ」として認識していく態度や相互に共通している点を見つけていく態度、互いを尊重し合う態度を育成していくことが重要とされている。</p> <p>本単元を通して、他国の人々に親しみをもち、自分たちと異なる文化の良さを感じたり、国際理解の一步として生かしたりして欲しいと考え、本単元を設定した。</p> <p>【単元の意義】</p> <p>1年生において、外国が身近であるとは言い難い。そこで、外国について教科横断的に扱うことで、継続的な学びのプロセスを構築することにつながると思う。</p>	

また、児童にとって身近な遊びや食事、絵本等を教材にする。そうすることで、日本との相違点や共通点に気付きやすく、外国に対する興味・関心がより高まると考える。単元の最後には、児童が外国の子ども宛てに書いた手紙を渡す。児童は、外国に友達ができたと喜び、外国をより身近な存在として感じられるだろう。

【児童観】

これまでに外国に行ったことがあるか尋ねると、数名の挙手があった。行き先を尋ねると、「韓国」や「中国」と答えた。しかし、中には「北海道」「沖縄」と答える児童もいた。1年生では、「外国」が遠い場所だという認識はあっても、その概念がはっきりしていない児童もいることが分かった。児童の発達段階からみても、まだまだ国際的な視野に立って物事を考えることは難しいと言える。

また、夏休みに「SDGs 時代みんなの家、みんなのまち」をテーマに、理想の家を考えてきた児童がいた。その児童をきっかけに、他の児童も SDGs に興味を持ち始め、絵本等を通して外国について学ぶ様子が見られている。6年生が取り組んでいる「服のチカラプロジェクト」では、掲示物や放送で SDGs や外国について見聞きする機会があり、興味関心をもつ児童が多かった。

これらのことから、本単元では世界の国の人々や文化の違いを理解し、その違いの良さを感じさせたい。そして、世界の国の人々と積極的に関わっていこうという心情につなげていきたい。

【指導観】

1年生では、児童の身近なものに焦点を当て、外国のものと「比較する」ことや「結びつきを知る」ことが大切である。そこで、指導にあたって、児童が外国のイメージを掴みやすいように、視覚教材や絵本を十分に活用していく。教室には、子どもたちが親しみやすいように、世界の絵本や遊びについてのコーナーを設置した。そうすることで、子どもにとって意識しづらい外国の文化を、楽しんで学ぶことができると考える。

本単元の学習を通して、外国の存在について知り、外国の人々や文化について気づきを深めさせたい。そして、一人一人が「知る」「考える」ことを大切にした授業展開を意識していくとともに、グループやクラスで話し合う機会を多くもつことで考えを共有し合い、多面的・多角的に世界について考えることができるようにしていきたい。

6. 単元計画(全8時間)

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
朝 学 習	読み聞かせ せかいのくにぐにの おはなしをしよう	・様々な国の絵本から、「世界そのもの」や「世界との繋がり」、「国による違い」などを知る。	①朝学習の読書の時間に、教師による読み聞かせを行う。 ②自分たちの知っている絵本や、新たに知った絵本が、世界の様々な国のものであることを知る。	・外国の絵本
1 本 時	道徳科 ぼくとジャオミン	・他国の人々に親しみを持ち、自分たちと異なる文化の	①日本に住む外国人の数を知る。	・さんざしの写真 ・ティージェンズの動画、実物 ・ワークシート

		よさに気づいて積極的に関わっていかうとする心情を育む。	②教材「ぼくとシャオミン」について話し合う。 ・二人の相違点や共通点。 ・二人がなぜ仲良しなのか。 ③外国に友達ができたなら、一緒にしてみたいことを考え、発表する。	
2 ～ 6	国語科 「おはなしせかいちず」をつかって、本をしようかいしよう	・世界の国々の絵本を読み、内容や感想を伝え合い、外国への興味・関心を高める。	①「おはなしせかいちず」を作り、世界の国々のお話を紹介するという学習内容をつかみ、学習の見直しをもつ。 ②世界の国々の本を探して、読む。 ③紹介カードを書き、国ごとに貼り、「おはなしせかいちず」を作る。 ④「かいがいつアー」を開き、本の紹介をする。 ・好きな場面や心に残ったことを発表し合う。 ・紹介された本を読み、「おきやくさまカード」を貼る。	・外国の絵本 ・世界地図 ・ワークシート
7 ～ 8	生活科 日本の「すてき」をつたえよう	・諸感覚を通して見つけた日本の良さについて話し合い、外国にいる子ども達へ手紙を書くことを通して、見つけたことを共感・共有する。	①外国の紹介VTRを見て、そこでも自分と同じような年代の子ども達が生活していることを知る。 ②外国の子ども達に伝えたい日本の「すてき」について話し合う。 ③外国の子ども達に手紙を書く。 ④学習の振り返りをする。	・PPT 「外国の子ども達の紹介」
7. 本時の展開(1時間目) 本時のねらい:他国の人々に親しみを持ち、自分たちと異なる文化のよさに気づいて積極的に関わっていかうとする心情を育む。				
過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料(教材)	
導入 (5分)	1 「2887116」という数字は何を表しているか考えて発表する。	・日本に住んでいる外国人が約300万人であることを話し、教材への方向付けをする。 ・300万人という数の多さを実感するために、自分の学校が○校分の人数、学年で○人中○人など、身近なもの結び付けて話す。		
展開 (30分)	2 教材「ぼくとシャオミン」の提示 ・教材を範読する。	・提示の仕方は教師の語りと学習支援材によって行う。		

<p>終末 (10分)</p>	<p>3 教材「ぼくとシャオミン」について話合う。 ○「たろう」と「シャオミン」の違うところは何だろう。 ○「たろう」と「シャオミン」の同じところは何だろう。 ◎自分とは言葉も好きな食べ物も得意なことも違う友達と一緒に遊ぶことのよさは何かを考える。</p> <p>4 他の国の友達ができたら、どんなことをしたり、聞いたりしたいかを考える。</p> <p>5 教師の説話を聞く。</p>	<p>・「たろう」と「シャオミン」の条件・状況を押しさえてから話し合う。 ・ペアで考えさせ、多様な視点で考えることができるようにする。 ・違うところはあるが、同じところはあまりないことに気づかせる。 ・違いを認め合うことの大切さやよさに気づけるようにする。</p> <p>・ほかの国の友達とだからこそできることを考えるように伝える。</p> <p>・自分とは違うことへの良さに気づき、仲良くしていこうとする気持ちを持てるようにする。</p>	<p>登場人物の絵 さんざしの写真</p>  <p>ティージェンズの動画、実物</p>  <p>ワークシート</p>
---------------------	--	--	--

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

他国の人々に親しみを持ち、自分たちと異なる文化のよさについて考えたり、積極的に関わっていきこうという思いを持ったりすることができたか。(ワークシート・発言)

9. 学習方法及び外部との連携

○グループ活動を数多く取り入れ、それぞれの思いや考えを出し合うことができるようにした。様々な見方・考え方を知るだけでなく、多様な価値観を受け入れ、学びを深めていくことにつながった。

○外国の子ども達と手紙の文通を行うため、実際に外国の現地校で勤務をしている方に協力をお願いした。その結果、子どもたちは相手意識を持って手紙を書くことができた。

10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

○千葉県教師海外研修報告会にて実践発表

○千葉県初任者研修にて「グローバル化時代に対応した教育」について発表

○「国際科教育推進フォーラム in 野田」にてパネルトークに参加

○第6学年「総合的な学習の時間」の「心と心でつながる世界」の第1時「SDGs って何だろう」の授業実践

【自己評価】

<p>11. 苦勞した点</p>	<p>違いには、「目に見えるもの」と「目に見えないもの」がある。1年生という発達段階において、児童はどうしても見た目に左右されがちである。そのため、単元のねらいを達成するために、どのようなカリキュラムをデザインすればよいかについて検討を重ねた。また、</p>
------------------	---

	<p>学年で共通の単元展開をしていく上で、授業時間の確保と内容の選定、伝える情報を厳選する必要があった。</p>
12. 改善点	<p>道徳科の授業では、「違いのよさ」を考えることをねらいとして授業を実践した。しかし、1年生という発達段階において、「様々なものが違う友達と遊ぶよさは何か」という発問は理解しづらかった。そのため、他のクラスでは、「言葉も好きな食べ物も得意なことも違う2人がなぜ仲良しなかのか」という発問に変更し、授業実践を行った。発問1つで児童の思考が変わっていくため、発達段階に応じた授業デザインをしていくことが重要である。</p> <p>また、今回は1年生で教科等横断的なカリキュラムに取り組んだ。しかし、1年間だけで目指す資質・能力の育成を達成できるわけではない。今後も目指す資質・能力を育成していくためには、教科間、学年間の繋がりを意識したカリキュラム・マネジメントが重要である。</p>
13. 成果が出た点	<p>教科等横断的な授業実践に取り組む中で、児童は世界に興味・関心を示し、親しみをもつようになった。また、道徳の授業を通して一つの国の文化を知ること、世界には日本以外の国があり、さまざまな人がいるということに気付くことができた。単元全体を通して身近なものに焦点を当てて学習し、外国のものと「比較する」ことや「結びつきを知る」ことで、自分たちとの違いについて「楽しい」「もっと知りたい」など前向きな姿勢が見られ、国際理解の素地を育むことができた。</p>
14. 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<p>【道徳科の授業「違いのよさ」についての振り返り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじめてのことを するのは たのしい。 ・ともだちになって いろいろはなすことで あいてのことを たくさんすることが できる。 ・じぶんのべんきょうしたことを おしえてあげられるから たのしくなる。 ・よさは いっぱいあるので ちがいて いいなと おもった。 ・ちがいが おおくても ころはつながると おもう。 ・きょうの じゅぎょうで した 中ごくのことを しらない人がいたら おしえてあげたい。 <p>【他の授業での様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語の「外国の絵本」を使った学習では、自分が選んだ絵本の国はどこにあるのか、興味深く世界地図を眺める様子が見られた。 ・休み時間にも「この国知っている！」「日本ってこんなに小さいんだ」「パラグアイってこんなに遠いんだね」など、世界地図を見て感じたことを互いに共有し合っていた。 
15. 授業者による自由記述	<p>2019年に教師海外研修に参加し、ザンビア共和国で五感をフルに活用し多くのことを学んだ。そして、今年度の研修に参加し、「関心を持ち続けること」の大切さを実感した。今回は代替国内研修という形であったが、日本にいてもザンビア共和国やパラグアイ共和国とのつながりを感じられる場面が多々あったからだ。もちろん海外で実際に見聞きし体験することで得られるものは大きい。しかし、そこで得たものの見方・考え方を生かせば、自分の身近なところにも教材となるものは多々あるということに気付くことができた。</p>

今回の研修で学んできたことを、いざ授業で生かそうとすると、子ども達は世界を「知る」ことから始まる。そのため、知識の詰め込み型の学習になってしまわないよう、子ども達の声に耳を傾けて単元を計画していった。子どもの実態を考慮した上で、思い切って内容を厳選したことで、子どもは主体的に学習に取り組むようになり、結果的に興味関心を広げることに繋がった。

今後は、各学年で単発的に取り組むのではなく、教科間や学年間の繋がりを意識し、学校内外の資源をより活用していくカリキュラム・マネジメントに取り組むことで、目指す資質・能力の育成につなげていきたい。

【参考文献】

- ・佐藤真久『未来の授業 SDGsライフキャリアBOOK』(宣伝会議)
- ・佐藤真久『未来の授業 私たちのSDGs 探究BOOK』(宣伝会議)
- ・スーザン・フッド『スラムにひびくバイオリン』(汐文社)